

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

名古屋モザイク工業

第8回

DESIGN AWARD

2023

受賞作品決定!

*全受賞作品および審査員コメントは、
同社ウェブサイトにて掲載。



「TAOYA日光霧降」

リゾートホテルをリノベーション。「山岳リゾートらしさ」を直感で感じられる柄をグラフィックで表現し、内装デザインとして取り込んだ。ダイニング内のバー・カウンター腰にはそのグラフィックを細かいモザイクタイルで表現。ロバート・ヴェンチュリが遺した建築の脈略を大事にしつつ、新たな息吹を吹き込むことに成功した。
使用商品:アートモザイク施釉10角 特注デザイン



タイルを使用した施工事例のコンテスト「デザインアワード2023」(主催:名古屋モザイク工業株式会社/岐阜県多治見市の総合タイルメーカー)の受賞作品が決定した。

今回、非住宅部門の金賞作品を手掛けた真田章太郎さんに、受賞作品のことから、タイルへの要望まで幅広くお聞きした。

既視感のない新しいものを作りたい

株式会社丹青社 真田章太郎さん



タイルの厚みが高級感を出す

TAOYAのリノベーションを担当して2軒目の案件です。毎回、土地に合わせたグラフィックを制作しています。今回のコンセプトは「山岳リゾート」で、それを直感的に感じるような幾何学模様や色使いを用いて制作しました。これをフロントのバックなど、ポイントとなる場所に配置して館内に統一感をもたせました。

この腰部分にもほかの場所と同様にグラフィックを印刷したシートを張る案もありました。ただ、ここはメインダイニングであり見せ場です。高級感や光沢感がある素材で表現したいと思い、モザイクタイルが候補に挙がりました。シートはフラットで軽く見えますが、タイルは凹凸や厚みといった質感があります。バー・カウンターらしい艶感を表現できるのではないかと考

え、お客様に提案したところ受け入れてもらえました。

ダイニングに入ってまず目につく場所なので、「この素材はなんだろう」と興味をひく存在になっているかなと思います。

—制作で苦労した点はありますか。

タイルの色の選択は難しかったですね。印刷なら色はいくらでも作れますが、タイルは既存の色の中からグラフィックの色に近いものを選んで置き換えていく必要があります。

使ったのは7~8色です。グラフィックはもっと色数が多いですが、そのままタイルで表現すると、まとまりのない印象になるため、色を絞りました。

また、タイルは細かいピースで見ると、引きで見るとでまったく印象が違います。一部分の色を指定し、それを元にモックアップを作ると、想定していた印象と違って何度か制作をしなければいけません。あえてグラフィックと違う色のタイルに置き換えた部分もあります。タイルで表現するために、デザインをしなければいけません。

通常は3Dパースを用いて、シミュレーションを行います。タイルは実物を見ないと分からない。そこが難しいですね。

—注目してほしい部分がありますか。

タイルに限ったことではないのですが、既存の建築ありきの中では、最小限の手数で最大限の効果を生むデザインが重要視されます。

たとえばダイニングでは、天井は作り替えず、既存のままです。一方、いくつも吊られていたシャンデリアのパーツを外して新たなデザインで組み、一つの大きなものに作り替えています。シャンデリアは少し古めかしさを感じますが、ホテルの歴史に脚光を当てるといって、デザインに取り込みました。

このシャンデリアに呼応させる仕器を考えたとき、本物感を出せる素材として思いついたのがタイルでした。

—クライアントの反響はいかがですか。

おかげさまで高い評価をいただきました。継続して指名してもらえる関係を築けていて、次の案件も楽しみにしてくれています。

次回にタイルを使うかは分かりませんが、僕自身はタイルが好きで、いろんな案件で使っています。

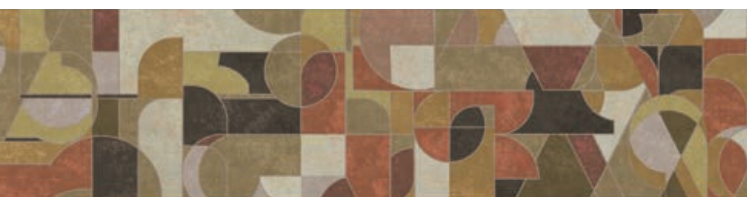
デザインアワードでもこれまで第1回に銀賞、第5回に銅賞をいただいています。今回で金銀銅コンプリートしました。

日本から発信できるものを

—今後タイルに求めるものは？

平面にタイルを張るのは簡単で採用されやすいですが、簡単すぎるといって、そこから考えるとデザインが決まってしまうので面白くないんです。

デザイナーが作りたいのは、「これはどうやって作っているの」と思われるような、既視感のないもの。たとえば、平面的でない空間や多面体を覆う場合、タイルはおさめ方が難しいので、最初に除外されてしまう素材でもあります。どんな角度でもきちんとおさめられる商材が開発されると、選択肢として優先順位が高くなるかなと思います。



グラフィックでは色の濃淡をつけている(上)。タイルでは色数を絞って表現した(下)。



旭化成株式会社・本社ギャラリー

真田さんによる タイル使用事例

本社の受付に設えられた展示空間をデザイン。旭化成のアイコンをイメージし、壁に立体感のある楕円形のタイルを施工した。「接着剤をくしびきにしてランダムにタイルを張ったので、タイルとタイルの隙間から流線状の模様が見えます。これもタイルの新しい使い方の一つになっているかと思います」

そうした新しい商材を開発するには、タイルメーカーさんとデザイナーと一緒に考えることが必要だと思います。「こういう空間を作りたいのですが、メーカーさんはどんなことができますか」と投げ掛け、意見をやりとりする中で、新しいアイデアが生まれるのではないのでしょうか。メーカーさんが受け身になりがちですが、うまくパートナーしての立ち位置でコミュニケーションができると、よいものが生まれてくると思います。

—メーカーさんと直接話す機会がありますか。

デザイナーも多忙で、商材の品番をスペックしてからスタートすることが多いです。するとある程度、デザインが固まってしまう。立案の段階で話す必要がありますが、時間がなかなか取れないので、普段からのコミュニケーションが大事なのでしょう。

たとえばミラノサローネを一緒に見に行くなど、プライベートと仕事の間くらいの関係性を構築できると、もう少し柔軟に新しい商材について話ができるのかもしれない。

今後はタイルメーカーさんとコミュニケーションを取ることを少しずつしていこうと思います。

—昔ながらの可愛いタイルも好まれますが、未来を見据えることも大切です。

タイルの魅力のひとつは、昔ながらのほっとするような懐かしさにあると思います。ただ、それをそのまま壁に張るだけでは、過去の再現になってしまう。懐かしみのあるタイルも、様々な形状にフィットできるようになると、懐かしさと新しさが融合した空間や物が生まれます。

過去の再現を求めるお客様もいるでしょうが、先を考えると「懐かしみがありながら未来的」というあり方を探求していく必要があると思います。

様々な新しい技術とうまく融合できると、面白いものができると思います。今はヨーロッパで開発された商品が数多く日本に輸入されていますが、日本から発信できるものがきっとあるはずですよ。

企画展
焼成編

工場賛歌

開催中～1月21日(日)まで

タイルの製造工程に光をあてた、
産地ならではの企画展「工場賛歌」シリーズ。
これまでの原料編、釉薬編、成型編に続き、
今回は焼成工程に注目した。



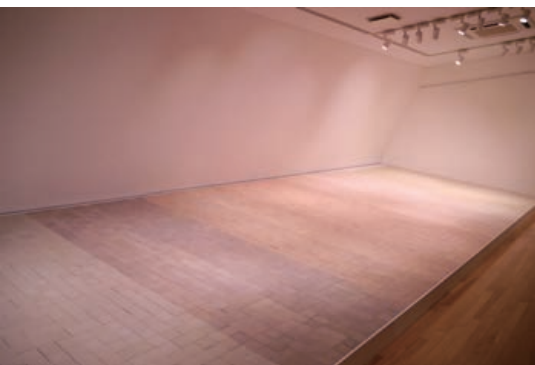
遠くからも作品の一部が見え、興味をかき立てられる。

端から端までタイルが敷き詰められた展示会場。
グレーやベージュの淡い色合いのグラデーションが
美しくアート作品のように見入ってしまう。

今回は「焼成編」と知って、解説パネルが並ぶ様子
を想像していたが、解説は隅にさりげなく添えられて
いる。まずはインスタレーションのように楽しんでほ
しい、という趣向のようだ。無数の素焼きタイルが醸
し出す静けさに浸りつつ、解説に目を向ける。

作品タイトルは「土がやきものになるとき」。タイル
の焼成過程において、窯の中で土から「やきもの」へ
と変化していく様子を視覚的に表す試みとして、岐阜
県多治見工業高等学校の専攻科の生徒たちにより研
究の一環として制作された。

白い粘土をタイルに成形し、250枚ずつ、100℃
から1300℃までの間で、100℃刻みで温度を変え
て焼成。生(乾燥状態)のタイルを左端に置き、右に
いくにつれ、焼成温度が高くなるように並べている。
グラデーションは、焼成温度の違いによるものだと
分かる。



「土がやきものになるとき」岐阜県多治見工業高等学校専攻科(作・所蔵)/2023年
300℃以下で焼成したタイルには、燃えた有機物の黒い点が現れているなど、見るほど新たな発見がある。

生徒たちによる制作風景。約4000枚にも上るタイルの成形は、手作業で行われた。作品の美しさは膨大な手間と労力の賜物。



窯に入れて焼成する際、タイル等
を載せる匣鉢(こうばち)。タ
イルに合わせて、大きさや形をミ
リ単位で調整して製作される。
神谷匣鉢製造所/製造・所蔵



窯の製造に用いる耐火煉瓦と
断熱煉瓦。品種番号が大きくな
るにつれ、耐火温度が高くなる。
高砂工業/所蔵

色の境目となる場所には、ポイントとなる温度を示すいくつかの小さな目印がつく。300℃で、粘土に含まれる有機物が燃えることにより発色。600℃では、粘土に含まれる結晶化した水が放出され、この温度以上で焼き上げたものは水につけても崩れない。ここが、土が「やきもの」へと変化する一つの境目となるという。

1100℃以上になると、敷き詰められたタイルの上辺が右側より目立って下がり、サイズが小さくなっていることに気づく。粘土の収縮率が増すためだ。製品とするタイルは1250℃で焼成することが多く、強度も出て反らずにきれいな形を保てるという。

そうした多くの知識と情報が、目の前のタイルから実感をともなって得ることができる。

まずはアート作品として全体を味わった後、解説を読んで細かい部分に目を向ける。二段階で楽しめる展示スタイルが新鮮だ。

今後、「工場賛歌」シリーズの続編があるかは未定だが、タイル製造工程は焼成後も続くため、その可能性もありそうだ。



展示コンセプトは「Public House」



中央に大型スクリーンを配置し、リフォーム動画やDIY動画などを上映した。

第45回 ジャパンホームショー開催

2023年11月15日(水)～17日(金)、東京ビッグサイト(東京都江東区)において住宅・建築関連専門展示会「Japan Home & Building Show 2023」が開催された。全国タイル工業組合が出展するブース「CERAMIC TILE PLAZA(セラミックタイルプラザ)」を紹介する。

社交場をイメージ

展示ブースは人々が集まり、食事やドリンクを楽しむ社交場をイメージした作り。タイル張りのバー・カウンターではドリンクを配布した。中央に広々とした空間を設け、大型スクリーンと、モザイクタイルで座面を装飾したツールを配置。ドリンクを片手に動画を視聴する方も多かった。

今回はタイルメーカーや接着剤メーカーの27社が40パネルを展示した。例年、気に入ったタイルを答えてもらうアンケートを実施しており、会場内を何度も行き来し、各社のタイルをじっくり見比べて回答を記入する姿が見られた。

来場者のご意見

ツールで一休みされていた女性お二人に感想をお聞きした。デベロッパーで商品企画を担当し、モデルルームのデザインにも携わっているという。



丸モザイクを張ったツール

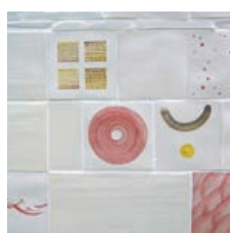
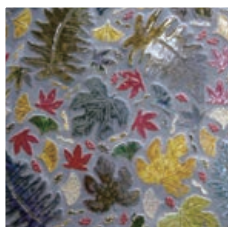
「今回初めて知るメーカーさんもありました。いろいろなメーカーのタイルがまとまって見られるのがいいですね」と好意的な感想をいただく一方、展示方法に関してこんなご意見をいただいた。

「何色展開と説明があるものは、実際のタイルで色を見たいですね。また、施工事例の写真があると、使用イメージがわかりやすいです」。ブース全体の印象としては「全体的に和風の色合いで、似たテイストのタイルが多いと感じました。もう少しカラフルなものがあったらいいかなと思います」との指摘があった。

会場にしばらくいると、「このタイルは外壁に使えますか?」といった下地に関する質問をされる方が散見された。購入先の問い合わせなども多く、目的意識が明確な来場者が目立ったという。

アンケートで人気だったタイル

錦秋
立風製陶



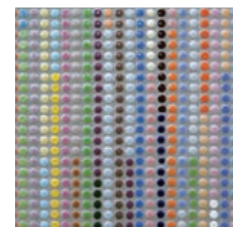
絵本
TNコーポレーション

OHM-5
杉浦製陶



モルテノヴァ
エクシズ

ミニオン
山周セラミック



ご自身とタイルの関わりを披露していただく不定期連載。
 第1回目は、旅行作家の蔵前仁一さん。
 建築や民俗アートにも詳しく、タイル好きでもあり、
 多治見や常滑に来られたこともあるそうです。
 今回は旅で出会ったタイルについて書いていただきました。



わが家に貼られたポルトガルの
 アズレージョ

タイルは時と国境を超えて

蔵前仁一

旅行作家

モスクに富士山

僕はタイルが好きで、自分の家にDIYでタイルを貼ったりしているが、いつごろから自分がタイル好きになったのかよく覚えていない。初めてタイルを見て驚いたのが、バングラデシュの首都ダッカでのことだった。ここにはイスラーム教のスターモスクという有名な礼拝堂がある。19世紀前半に建立されたモスクだが、その壁にはなんと富士山が描かれたタイルが貼られていたのだ。イスラーム教のモスクに富士山とはちょっと奇妙な取り合わせだが、イスラームでは人物や動物の像をモスクに飾らないので、このような自然の風景が歓迎されたのだろう。



もちろん富士山のタイルは日本製だという。それがどういうわけか日本から輸入され、まるで文化の異なるバングラデシュのモスクを飾ってきたのだ。そのとき、僕は初めて、日本のタイルがアジアや世界各地に輸出されているということを知った。

大正から昭和にかけて、バングラデシュの隣国インドにもヒンドゥー教の神様を描いたタイルが日本から盛んに輸出されたという。残念ながらインドでは日本製のタイルにお目にかかれなかったが、南インドのコチにあるユダヤ教のシナゴグに行くと、床に敷かれたタイルには中国の風景が描かれていた。中国から輸入されたこのタイルは18世紀に敷設されたらしい。

タイルに目覚める

そもそも僕はこのときまでタイルがどこで作られているかなど考えたこともなかったし、世界にどのようなタイルがあるのかも知らなかった。だが、それから世界各地をあちこち歩いているうちに、実に様々なタイルが作られていることを知り、それを見るのが楽しみになっていった。

例えばイランのイスファハーンという街には、世界遺産になっている大きなモスクがいくつもある。17世紀ごろ建立されたこれらのモスクは膨大な数のタイルで覆われている。その文様はあまりにも精緻のため



スターモスクに貼ってある
 富士山のタイル
 (バングラデシュ)

息が出るほど美しい。イランの周辺にあるイスラーム国であるトルコ、中央アジアの国々、あるいは北アフリカのモロッコやチュニジアのモスクも美しいタイルで装飾されており、イスラームにとってタイルは非常に重要な装飾技法であることがわかる。

もちろんタイルはイスラームだけのものではない。僕が旅した国で最もタイルに囲まれていたのはポルトガルである。ここでは装飾タイルのことを「アズレージョ」と呼ぶが、多くの建物や公園が美しいアズレージョで覆われている。観光客にも人気が高いので新作から古いものまで様々なアズレージョが販売されている。

大地震をくぐり抜けたタイル

首都リスボンでは週末になると、広場で泥棒市が開かれ、そこで古いアズレージョが売られている。多少欠けたり割れたりしているが、安いものは2.5ユーロほどだ。現在のレートだと約400円だが、いつごろのものかと聞くと、だいたいみんな18世紀ごろだという。いくら欠けているとはいえ、そんな古いものをわずか400円で売るものだろうか？

詳しく話を聞くと、リスボンでは1755年に大地震に見舞われ、街のほとんどが灰燼に帰したという。街を再建するときに被害に遭った建物から古いアズレージョが剥がされて、それが今でもこうやって市中に流れているのだそうだ。まさに歴史を刻み込んだアズレージョだが、文様の少ない大量生産品は人気がないので安いらしい。

僕もそういうアズレージョを数枚買った。鳥が描かれた6枚組のアズレージョで、当時のレートで5000円ぐらいだった。読者もご存知のように、陶磁器のように焼かれたタイルは、強い日光にさらされ、長い年月を経ても、ほとんど色褪せることがない。数百年前に日本や中国からバングラデシュやインドに運ばれたタイルと同じように、18世紀の大震災をくぐり抜けたポルトガルのタイルは、美しさを保ったまま今もわが家の壁を飾っている。

蔵前仁一(くらまえ・じんいち)

1956年、鹿児島県生まれ。旅行作家、グラフィックデザイナー、編集者。1980年代からアジアを中心に世界各国を旅する。1995年に出版社「旅行人」を設立し、旅行雑誌、ガイドブックなどを発行。最新刊『旅がくれたもの』(旅行人刊)では、旅で買ったもの約400点を紹介している。



リスボンの泥棒市で売られている古いアズレージョ



南インドのシナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)

南インドのシナゴークの床に貼られたタイルには中国の草花や景色が描かれていた

